

祭光

749号

2023年7・8月
日本基督教団
田園調布教会
伝道部発行

〒145-0071
東京都大田区田園調布
3-34-18
電話 03-3721-2811
FAX 03-3721-2814
<https://den-church.jp/>

壁を超える祈り

エゼキエル書 二六章一〜六節
マタイによる福音書 一五章二一〜二八節

牧師 高橋 和人

主イエスはユダヤの境を越えてティルス・シドンに行かれました。そこは、地中海に面した地域で、ユダヤの地の北側で今はレバノンになります。ティルスは小さな島とその対岸の地域を指します。そこはユダヤの人々には歴史上の傷を思い出させる地でした。

ティルスは古代都市の中でも最も古くから発達した文化を持ち、国土は狭かったのですが、地中海交易の独占的な中心地として繁栄します。交易によって富が集中し、高度な文明を誇り、強大な軍勢力を誇ってきました。

ティルスとイスラエルとは時代によって関係が変化しました。ダビデ・ソロモン時代は友好な関係で、ソロモンによるエルサレム神殿建築造営には大量のレバノン杉の供給をティルスから受けたようです。その後も隣国の文明国として友好と敵対が繰り返されました。ユダヤの人々の思いに決定的であったのは、

新バビロニアによるイスラエルの南ユダへの侵攻の際のことでした。滅亡に瀕したユダ王国をティルスが見捨てます。紀元前五八三年ごろです。そして、ティルス自体は一三年もの包囲戦に耐えて存続しました。エゼキエル書は二六〜二八章にわたって、詳しくティルスの姿に触れています。そして祖国の滅亡を傍観するティルスへの裁きを預言します。イザヤ書二三章にも同じようにティルスへの審判が語られます。

ティルスは独自の宗教をもっていました。エゼキエル書には富と美しさを誇る文明国意識の高い、周辺国を見下すような姿を語っています。イスラエルとは信仰も生活様式も言葉も違い、利害関係が一致するときには近づき、都合によって見捨てるというまさに因縁ある隣国です。最も近い異邦の地でした。主イエスがそこに行かれたということは異

邦人とユダヤ人の境界を越えて異邦人の地に足を踏み入れられたということです。

そこで主イエスのもとに生粋のカナンの女性が近づいてきます。彼女がどのような女性を知り主イエスをたずねて来たかは記されていません。しかし女性ははっきりと「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と叫びながら訴えます。娘が病気で苦しんでいました。この叫びは九章で二人の盲人が癒されたときと同じです。「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」という叫びはユダヤの民と同じ言葉になっていました。主イエスは答えます。沈黙しています。

弟子たちは彼女を厄介者扱います。「叫びながらついてくる。」主イエスにしつこい、追い払って欲しいというのです。

主イエスは「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしから遣わされていない」(二四節)と答えます。これは主イエスがはっきり拒否されたことを示しています。ところがこの女性はさらに、主イエスの前にひれ伏して、助けを求めます。「主よどうかお助け下さい」は一四章三〇節のペトロが「主よ、助けてください」と叫んだ声と重なります。主イエスは「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」(二六節)と拒否されます。沈黙されたことも含めると三度目の拒否です。

「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」と言われたのは、主が「ダビデの子」として来られたこと、つまりイスラエルに立てられた救いの約束に基づくものだからです。異邦人は主イエスの働きの範囲外だと